国際美術展 TOKYO ATLAS
International Art Exhibition

プレスリリース
2026年10月8日

東京都　東京国際文化芸術祭実行委員会　公益財団法人東京都歴史文化財団

目次

1 開催に寄せて ―― P2

2 アーティスティック・ディレクター ―― P4

3 会場と参加アーティスト ―― P5−14

台場エリア：台場公園・お台場海浜公園 ―― P4

天王洲エリア：アイルしながわ ―― P7

青海エリア：テレコムセンタービル／青海南ふ頭公園／地下駐車場（青海南ふ頭公園内）／
東京国際クルーズターミナル／東京臨海部広報展示室TOKYOミナトリエ ―― P8

4 ヴィジュアル・アイデンティティ ―― P15

5 関連企画 ―― P16

6 連携企画 ―― P17

7 イベントリスト ―― P18−20

8 開催概要 ―― P21

9 パートナー ―― P22

1 開催に寄せて

国際美術展「TOKYO ATLAS」は、国際的な文化の潮流が交錯する都市、東京ならではのアートを媒介とした多様な価値観との出会いや交流が生まれるプラットフォームの創出を目指して開催されます。会場となる臨海部は、文字通り、海に向けて開かれた国際都市を象徴する地域であり、本美術展の意図にふさわしい環境を有していると言えるでしょう。

この美術展の特色は、多彩なアートのプロジェクトを美術館などの専用施設に囲い込むのではなく、あえて日常的な市民生活が営まれている都市空間の中に挿入し、街の光景と一体化させることにあります。

タイトルの「ATLAS」とは世界を支える神話的存在であるアトラスに由来し、同時に地図帳を意味しています。私たちは街中に設置された作品を巡り歩くことで、まさに未知の地図をたどるかのように、わくわくした出会いを重ねることになるでしょう。それは東京という街の魅力を新鮮な眼差しで再発見することでもあるはずです。

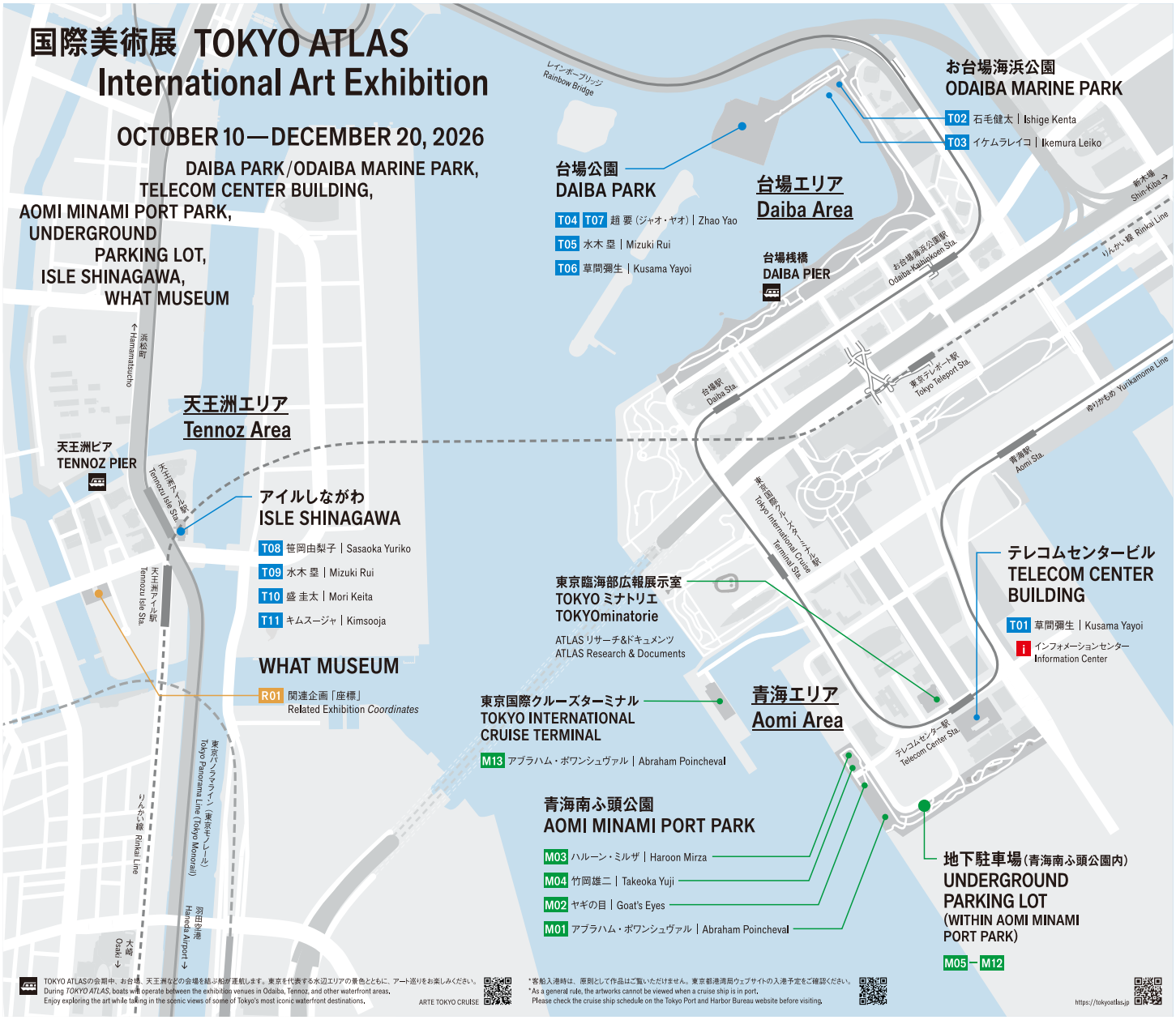
たとえば、主たる会場の一つ、台場公園は幕末に黒船を迎え撃つ砲台として築かれながらも、結果的には一発の砲弾も放つことなく開国を迎えたというエピソードが伝わる人工島です。近代の幕開けを告げるこの史跡としての公園に配置される作品群は、歴史と先端的なアートが出会う不可思議な景観を出現させるに違いありません。

もう一つの主要なエリアである青海南ふ頭公園エリアは、コンテナふ頭に隣接し、東京国際クルーズターミナルなど東京港の国際的な海運を見渡すことができる場所です。屋外と地下空間に展開されるさまざまな作品やプロジェクトを通して、独自の視点で都市の風景やインフラ、場所性などについて考察する機会となるでしょう。

既存の都市空間へのこうした挑戦は、国際的なアートシーンの第一線に立つアーティストたちの想像力の豊かさや多様な価値観に触れる喜びを観客へもたらすと同時に、東京という都市が秘めている意外な側面、あえて言うならば野生的なバイタリティに目を向けさせてくれることになるかもしれません。

本美術展には東京都が支援してきた若い世代のアーティストたちの作品を紹介する部門も設けられています。都市環境の中で開催されるこの企画が、未来に向けて好奇心を醸成し、新たな「ATLAS」を描いていくことを願います。

東京国際文化芸術祭実行委員会、TOKYO ATLAS アーティスティック・ディレクター 建畠 晢・三木あき子


国際美術展 TOKYO ATLAS
International Art Exhibition
OCTOBER 10—DECEMBER 20, 2026
DAIBA PARK/ODAIBA MARINE PARK,
TELECOM CENTER BUILDING,
AOMI MINAMI PORT PARK,
UNDERGROUND
PARKING LOT,
ISLE SHINAGAWA,
WHAT MUSEUM
レインボーブリッジ
Rainbow Bridge
お台場海浜公園
ODAIBA MARINE PARK
T02 石毛健太 | Ishige Kenta
T03 イケムラレイコ | Ikemura Leiko
台場公園
DAIBA PARK
T04 T07 趙 要（ジャオ・ヤオ）| Zhao Yao
T05 水木 塁 | Mizuki Rui
T06 草間彌生 | Kusama Yayoi
台場エリア
Daiba Area
台場桟橋
DAIBA PIER
新木場
Shin-Kiba
りんかい線 Rinkai Line
お台場海浜公園駅
Odaiba-Kaihinkoen Sta.
東京テレポート駅
Tokyo Teleport Sta.
台場駅
Daiba Sta.
ゆりかもめ Yurikamome Line
青海駅
Aomi Sta.
浜松町
Hamamatsucho
天王洲エリア
Tennoz Area
天王洲ピア
TENNOZ PIER
ゆりかもめ 天王洲アイル駅
Tennozu Isle Sta.
アイルしながわ
ISLE SHINAGAWA
T08 笹岡由梨子 | Sasaoka Yuriko
T09 水木 塁 | Mizuki Rui
T10 盛 圭太 | Mori Keita
T11 キムスージャ | Kimsooja
WHAT MUSEUM
R01 関連企画「座標」
Related Exhibition Coordinates
東京臨海広報展示室
TOKYO ミナトリエ
TOKYOminatorie
ATLAS リサーチ&ドキュメンツ
ATLAS Research & Documents
東京国際クルーズターミナル
TOKYO INTERNATIONAL
CRUISE TERMINAL
M13 アブラハム・ポワンシュヴァル | Abraham Poincheval
東京国際クルーズターミナル駅
Tokyo International Cruise Terminal Sta.
テレコムセンタービル
TELECOM CENTER
BUILDING
T01 草間彌生 | Kusama Yayoi
i インフォメーションセンター
Information Center
テレコムセンター駅
Telecom Center Sta.
青海エリア
Aomi Area
青海南ふ頭公園
AOMI MINAMI PORT PARK
M03 ハルーン・ミルザ | Haroon Mirza
M04 竹岡雄二 | Takeoka Yuji
M02 ヤギの目 | Goat's Eyes
M01 アブラハム・ポワンシュヴァル | Abraham Poincheval
地下駐車場（青海南ふ頭公園内）
UNDERGROUND
PARKING LOT
(WITHIN AOMI MINAMI
PORT PARK)
M05—M12
東京パノラマライン（東京モノレール）
Tokyo Panorama Line (Tokyo Monorail)
りんかい線 Rinkai Line
羽田空港
Haneda Airport
大崎
Osaki
TOKYO ATLASの会期中、お台場、天王洲などの会場を結ぶ船が運航します。東京を代表する水辺エリアの景色とともに、アート巡りをお楽しみください。
During TOKYO ATLAS, boats will operate between the exhibition venues in Odaiba, Tennoz, and other waterfront areas.
Enjoy exploring the art while taking in the scenic views of some of Tokyo's most iconic waterfront destinations.
ARTE TOKYO CRUISE
*客船入港時は、原則として作品はご覧いただけません。東京都港湾局ウェブサイトの入港予定をご確認ください。
*As a general rule, the artworks cannot be viewed when a cruise ship is in port.
Please check the cruise ship schedule on the Tokyo Port and Harbor Bureau website before visiting.
https://tokyoatlas.jp

2 アーティスティック・ディレクター



Photo by Kitajima Akira

建畠 哲 | Tatehata Akira （写真左）

美術評論家、詩人／草間彌生美術館長、京都芸術センター館長、川口市立美術館長
京都市立芸術大学および多摩美術大学名誉教授

国立国際美術館主任研究官、多摩美術大学教授、国立国際美術館長、京都市立芸術大学学長、多摩美術大学学長、コロンビア大学訪問研究員などを歴任。美術館と大学で現代美術の展覧会企画や教育研究に携わるとともに、ヴェネツィア・ビエンナーレ日本館コミッショナー（1990、1993）、横浜トリエンナーレ（2001）、あいちトリエンナーレ（2010）、東アジア文化都市京都「アジア回廊」展（2017）など国際美術展の芸術監督を務めてきた。受賞歴はオーストラリア国家栄誉賞、文化庁創立50周年記念表彰、京都市文化功労者。詩人としては、歴程新鋭賞、高見順賞、萩原朔太郎賞を受賞している。

三木あき子 | Miki Akiko （写真右）

キュレーター／直島新美術館長、ベネッセアートサイト直島インターナショナル・
アーティスティック・ディレクター

パレ・ド・トーキョー（パリ、フランス）の創設メンバーとして2000年から2014年までチーフ&シニア・キュレーターを務めるとともに、台北ビエンナーレ（1998）、ヨコハマトリエンナーレ2011アーティスティック・ディレクター、同2017コ・ディレクター、バンコク・アート・ビエンナーレ（2024）など国際現代美術展の芸術監督やキュレーターを歴任。また、バービカン・アート・ギャラリー（ロンドン）、台北市立美術館、韓国国立現代美術館、森美術館、横浜美術館、京都市京セラ美術館、弘前れんが倉庫美術館にて、数々の展覧会のゲスト・キュレーターも担う。『Insular Insight』（Lars Müller、2011、ドイツ建築博物館建築本賞）など共著・共編も多い。

3 会場と参加アーティスト

建畠 哲 アーティスティック・ディレクター 展示

担当エリア
[台場エリア] 台場公園・お台場海浜公園
[天王洲エリア] アイルしながわ
[青海エリア] テレコムセンタービル

企画体制
黄 夢圓（アシスタント・キュレーター）
西山裕子（プロジェクト・コーディネーター）
水田紗弥子（コーディネーター）

台場エリア ｜ 台場公園・お台場海浜公園

会場

幕末期に黒船を迎え撃つ砲台として築かれた台場は、一発の砲弾も放つことなく開国を迎えた歴史を持つ人工の島です。その跡地が公園となった本会場は、草地や灌木の中に史跡が点在するという野趣に溢れた空間で、自然と歴史とが共存する独特の雰囲気が醸し出されています。一方、接続するお台場海浜公園は人工の砂浜で、台場公園とは対照的に海へ向けて広がる大らかな景観のダイナミズムを有しています。

これらの地区では、草間彌生による《ナルシスの庭》（1966／2026）や趙要（ジャオ・ヤオ）による《Something in the Air》（2019）、石毛健太による音響インスタレーション作品などの環境を生かした作品が配置されます。さらには、イケムラレイコによる高さ6mの巨大彫刻作品もお台場海浜公園沖の水上に設置されます。鑑賞者は散策し、立ち止まり、振り返ることで、美術館などとは異なった作品と場との関係そのものを体験することになるでしょう。それは東京という都市の魅力の再発見の機会ともなるに違いありません。



台場公園
1928年7月7日開園、面積29,963.40㎡。ペリー来航を機に、外国の脅威から江戸を守るために幕府が砲台として築造した。現存する二つの台場のうち「第三台場」が都立公園となり、陣屋や火薬庫の跡など、貴重な江戸時代からの史跡も残る。



お台場海浜公園
1975年12月1日開園。面積510,809.79㎡（うち水域435,395.00㎡）。対岸に高層ビル群を臨み、海を公園の一部とする都市型海浜空間。全長約800mの人工砂浜「おだいばビーチ」からはレインボーブリッジや夕景・夜景を一望できる。

参加アーティスト

イケムラレイコ ｜ Ikemura Leiko

三重県津市生まれ。ベルリン、ケルン拠点。1970年代にスペインへ渡り、セビリア美術大学で学んだ後、スイスを経てドイツを拠点に活動。絵画、彫刻、ドローイング、写真、ガラス作品など多様なメディアを横断しながら、生命の生成や変容、人間と自然、生と死の境界といった根源的なテーマを探求している。少女や動物、風景を想起させる有機的なモチーフを通じて、東洋的感性とヨーロッパ絵画の伝統が交差する詩的かつ幻想的な世界観を展開し、国際的に高い評価を得ている。1991年から2015年までベルリン芸術大学教授を務めた。2025年文化功労者。

近年の主な個展に、「Motherscape」（アルベルティーナ美術館、ウィーン、オーストリア、2025）「The Sea in the Mountains」（ビュンドナー美術館、クール、スイス、2025）、「Light on the Horizon」（Heredium、デジョン広域市、韓国、2024）、「Toward New Seas」（バーゼル美術館、スイス、2019）、「土と星　Our Planet」（国立新美術館、東京、2019）がある。



《ムーンラビット・ランディング》コンセプト・ドローイング2026



©Leiko Ikemura
Photo by María Rúnarsdóttir

台場エリア | 台場公園・お台場海浜公園

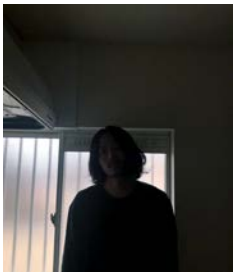
参加アーティスト

石毛健太 | Ishige Kenta

1994年神奈川県生まれ、東京拠点。多摩美術大学情報デザイン学科メディア芸術コース卒業後、東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修了。美術家、エキシビションメーカーとして、絵画、インスタレーション、プロジェクト型の作品など多様な表現を横断しながら、都市や日常の風景、知覚と物語の関係を探る制作を行っている。現場と関係を結ぶ実践的なプロジェクトや、作品と鑑賞者の偶発的な出会いを組み込む構造的アプローチが特徴である。

近年の主な展覧会に、個展「Fever dream」(FOC、石川、2026)、「日本現代美術私観：高橋龍太郎コレクション」(東京都現代美術館、東京、2024)、「ジャンクス・ポーツ」(ANOMALY、東京、2023)





《ただの水ではない》2019
「生きられた庭」(京都府立植物園、京都、2019での展示風景)

水木 塁 | Mizuki Rui

1983年京都府生まれ、同地拠点。京都市立芸術大学大学院美術研究科メディア・アート領域博士後期課程修了。郊外、多種性、自然、ストリートカルチャー、移動などをキーワードに、都市文化と美術史上の問題を接続しながら、現代都市における風景・情景・身体・モノの絡まり合いを主題とした作品を制作している。

近年の主な展覧会に、「包摂とL」(京都芸術センター、京都、2025)、「EAST EAST」(Manggha Museum of Japanese Art and Technology、クラクフ、ポーランド、2025)、個展「凪に、傾く陽と。」(CAVE-AYUMI GALLERY、東京、2025)、「見るは触れる 日本の新進作家 vol.19」(東京都写真美術館、東京、2022)、個展「東下り」(WAITINGROOM、東京、2019)、個展「鏡と穴―彫刻と写真の界面 vol.3 水木塁」(gallery αM、東京、2017) などがある。

※水木は「アイルしながわ」にも作品を展示いたします。





《P⁴ (Pioneer Plants Printing Projects)》2025

趙要(ジャオ・ヤオ) | Zhao Yao

1981年四川省生まれ、北京拠点。絵画、インスタレーション、写真、映像、パフォーマンスといった多様な表現を横断しながら、認識論や知覚、日常性、制度的な枠組みなどに鋭く切り込む独自の視点で制作している。日常の経験と芸術的経験との架け橋を築き、知覚と意味の生成を問う作品は、観る者に慣れ親しんだものを再考させる知覚的・概念的な体験をもたらす。

近年の主な展覧会に、「If the World We」(第59回カーネギー・インターナショナル、カーネギー美術館、ピッツバーグ、アメリカ、2026)、個展「By and by it unfolds and then folds」(Fosun Foundation、上海、中国、2025)、「タイランド・ビエンナーレ」(プーケット、タイ、2025)、個展「まぁ普通、でも…」(オオタファインアーツ東京／7CHOME、東京、2025)、個展「Signals from Heaven, Signals from Heaven」(北京公社、北京、中国、2018)、個展「A Painting of Thought」(Pace Gallery、香港、2015) などがある。





《Something in the Air》2019
© Zhao Yao, Courtesy of Ota Fine Arts

天王洲エリア ｜ アイルしながわ

会場

かつて都市のごみ集積場として使われていた本施設は、再開発によって周辺の水辺沿いの広場や遊歩道が整備され、歴史の記憶を内包した都市空間として生まれ変わっています。人工的な構造物と開かれた水面、かつての用途の名残が混ざり合うこの場所では、笹岡由梨子による映像インスタレーション、盛 圭太によるインスタレーション作品などが展示される予定です。



アイルしながわ
2022年10月開設、面積約900㎡・天井高約10m。旧東品川清掃作業所を再活用した交流拠点。天王洲アイルの運河沿いに位置し、アート活動やパラスポーツなどの施設利用を通じて地域の賑わいを生み出している。

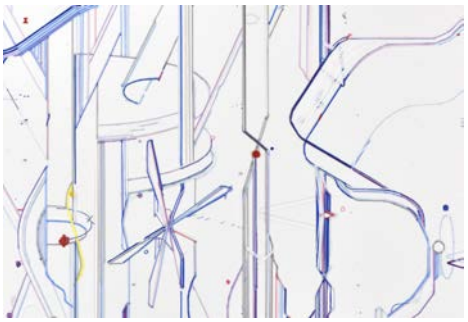
参加アーティスト

盛 圭太 ｜ Mori Keita

1981年北海道生まれ。パリ拠点。2004年に多摩美術大学彫刻学科卒業後、文化庁新進芸術家海外研修員として渡仏。パリ国立高等美術学校に在籍した後、パリ第VIII大学大学院美術研究科先端芸術修了。糸を紙や壁面にグルーガンで貼り付ける独自の手法によるドローイング作品で知られ、線の起源を「糸」とする仮説を基点に、建築、織物、都市構造、システムに内在する「バグ（エラー）」を主題とした制作を展開している。緻密な構造と偶発性が共存する作品は、ドローイングの空間的・彫刻的拡張として国際的に高い評価を得ている。

近年の主な展覧会に、個展「／」（多摩美術大学彫刻棟ギャラリー、東京、2026）、個展「眠たい名前」（アニエスベー ギャラリー ブティック、東京、2023）、「ドローイングの可能性」（東京都現代美術館、東京、2020）、「Walk The Line – New Paths in Drawing」（ヴォルフスブルク現代美術館、ヴォルフスブルク、ドイツ、2015）などがある。

協賛：横田株式会社





《Bug report》（部分）2024
© ADAGP Keita Mori. Photo by Rebecca Fanuel
Courtesy the artist and Galerie Putman, Paris

笹岡由梨子 ｜ Sasaoka Yuriko

1988年大阪府生まれ。関西拠点。自らが主演する操り人形芝居仕立ての大規模な映像インスタレーション作品で知られるが、その手作り感のあるユーモラスなイメージとストーリーは、愛や家族といったアンチームなテーマなどに想を得つつも、時にいささか辛辣であり不穏でもある文化的な省察や批評性を宿している。また、中東欧に長期間滞在し、自ら作詞作曲した壮大な民族叙事詩ともいうべき作品を制作するという発想のスケールの大きさも注目される。

近年の主な展覧会に、個展「笹岡由梨子のパラダイス・ダンジョン」（滋賀県立美術館、滋賀、2026）、個展「ポロニア × キュリー・マジック・ラボ ー 移動の力 ー」（大阪市中央公会堂、大阪、2025）、個展「Yuriko Sasaoka: Animale」（PHD Group、香港、2025）、個展「Zniknij Z Ziemi」（Trafostacja、シュチェチン、ポーランド、2021）などがある。





Photo by S.C.Felix Wong

《タイマツ》2026. Photo by 麥生田兵吾

キムスージャ ｜ Kimsooja

1957年大邱生まれ、ソウル拠点。絵画、縫製、インスタレーション、パフォーマンス、映像、光、音など多様な表現を通して、媒体や形式の区別を超え、生命と芸術の全体性を探究。非物質的なものを追求し続ける彼女の揺るぎない姿勢と、「何もしないこと、何かをつくらないこと（non-doing, non-making）」を美学的な枠組みとして取り入れる姿勢は、さまざまな媒体や方法論への長年にわたる取り組みの根底にある。それは、概念的かつ瞑想的な美学とヒューマニズムを通じて、芸術と人間のあり方を問い続ける彼女の実践を支えている。
主な展示に、「Dimensions of a Needle」（トロント現代美術館［MOCA Toronto］、トロント、カナダ、2026年）、「To Breathe – Mokum」（Oude Kerk、アムステルダム、オランダ、2025年）、「To Breathe」（He Art Museum［HEM］、佛山／広州、中国、2025年）、「To Breathe – Constellation」（ブルス・ドゥ・コメルス—ピノー・コレクション、パリ、フランス、2024年）などがある。





Portrait at EMST
by Giannis Vastardis

《針の女 東京》1999

青海エリア ｜ テレコムセンタービル

会場

青海エリアを象徴し、大規模なスケールを有する本ビルの中心にあるアトリウムに、草間彌生による2つのバルーン作品、《ヤヨイちゃん》（2012／2023）と、日本初公開となる《宇宙へ行って見た愛の花束》（2021）を展示します。この2作品を組み合わせて展示する試みは、世界初です。《ヤヨイちゃん》が作家自身の分身として「内なる宇宙」を象徴する存在であるのに対し、《宇宙へ行って見た愛の花束》は、生命と愛が無限に広がっていく「外なる宇宙」のイメージを体現しています。両作が出会うことで、内と外、個と宇宙が対話する場が立ち上がります。

柔らかなバルーン素材は硬質な建築空間と呼応し、アトリウム全体を包み込む祝祭的な空間を生み出します。来場者は上下階を移動しながら多様な視点で作品を体験でき、昼夜によって異なる表情を見せる空間は、幻想的な “草間彌生の宇宙” として強い印象を残すでしょう。



テレコムセンタービル
1996年2月 開 業、面 積158,050.18㎡。全面ガラスウォールが印象的な臨海副都心のランドマーク的存在であり、高い安全性と快適な職場環境を提供するビル。高さ37m、5層吹き抜けの大規模なアトリウムを有する。*写真はアトリウム

参加アーティスト

草間彌生 ｜ Kusama Yayoi

1929年長野県松本市生まれ、東京拠点。幼少期から幻視・幻聴を体験し、網目模様や水玉をモチーフにした絵画を制作し始める。1957年に渡米、ネット・ペインティング、ソフト・スカルプチュア、鏡や電飾を使ったインスタレーションやハプニングなど多様な活動を展開し、ニューヨークのアートシーンを牽引するアーティストとして注目を浴びた。70年代半ばに帰国。単一モチーフの強迫的な反復と増殖による自己消滅という独自の世界は、90年代に入って改めて高く評価されるようになり、近年は巨大なバルーンを浮遊させたインスタレーションでも知られる。

これまで1998年にニューヨーク近代美術館など国内外の主要美術館で回顧展が開催されるほか、現在も大規模個展「Yayoi Kusama」がヨーロッパ3カ国を巡回中。東京には2017年に草間彌生美術館が設立され、作家自身の構想に基づき、その表現と思想を継続的に発信している。

※草間は「台場公園」にも作品を展示いたします。





《宇宙へ行って見た愛の花束》2021、「Yayoi Kusama: A Retrospective」（グロピウス・バウ、ベルリン、ドイツ、2021）での展示風景
© YAYOI KUSAMA, Courtesy of Ota Fine Arts

3 会場と参加アーティスト

三木あき子 アーティスティック・ディレクター 展示

担当エリア
[青海エリア] 青海南ふ頭公園、地下駐車場（青海南ふ頭公園内）、東京国際クルーズターミナル、東京臨海部広報展示室TOKYOミナトリエ

企画体制
兼平彦太郎（キュレーター）
坂口千秋（プロジェクト・コーディネーター）
大曽根朝美（コーディネーター）

コラボレーター
フジワラテッペイアーキテクツラボ
HIGURE 17-15 cas
滝口悠生
ふぇみにゃん

青海エリア ｜ 青海南ふ頭公園

会場

保税エリアを擁し、大型貨物コンテナやガントリークレーンが並ぶ青海コンテナ埠頭に隣接する青海南ふ頭公園は、東京国際クルーズターミナルや対岸の大井コンテナ埠頭など、東京港の国際的な海運を見渡すことのできる公園です。ここでは、作家自ら巨大なボトルのなかで生活し、プライバシーや公共空間の在り方を検証するアブラハム・ポワンシュヴァルのパフォーマンス作品《La Bouteille》（2015ー）や、東京藝術大学小沢剛研究室らによるヤギの飼育を通して、持続可能な創作や研究、表現の場を探求する《ヤギの目》（2020ー）といったプロジェクトを予定しています。東京という国際都市の水辺で、アーティストや参加者たち相互の対話や、人間のみならず動物や植物との共存から、オルタナティブな社会実践やこれからのコミュニティの在り方を思索するキャンプサイト、あるいはヴィレッジのような場をイメージしています。



青海南ふ頭公園
1997年4月1日開園、面積43,760.40㎡。臨海副都心地区の南端に位置し、青海コンテナ埠頭に隣接するL字の形をした公園である。船や飛行機、大きなコンテナ埠頭の風景とともに開放的な景色が広がる。

参加アーティスト

アブラハム・ポワンシュヴァル ｜ Abraham Poincheval

1972年アランソン（フランス）生まれ、マルセイユ拠点。ポワンシュヴァルは飽くなき探検家である。彼の探検は自身の身体との関わりによって遂行され、このとき作り出される居住可能な彫刻は、時間の経過や不動の状況などについて考察する実験室であり、アーティストを受け入れる容器でもある。そしてそれは風景を異化し鑑賞者が目撃する物語を実在化するオブジェとして機能する。

近年の主な展覧会やパフォーマンスに、パリオリンピックに合わせてサン=ドニ運河に巨大なボトルを浮かべ、そこで10日間生活した《La Bouteille》（パリ、フランス、2024）をはじめ、「La Collection, Rendez-vous avec le sport」（Fondation Louis Vuitton、パリ、フランス、2024）、「バンコク・アート・ビエンナーレ 2024」（バンコク、タイ、2024）などがある。

助成：在日フランス大使館／アンスティチュ・フランセ
協賛：アニエスベー

※ポワンシュヴァルは「東京国際クルーズターミナル」にも作品を展示いたします。





Photo by Jean-Christophe Lett

《La Bouteille》2024、パリでのパフォーマンス風景
Photo by Hafid Lhachmi / ADAGP Paris 2024. Courtesy Semiose

ヤギの目 ｜ Goat's Eyes

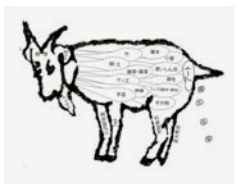
2020年発足。東京藝術大学先端芸術表現科の小沢剛研究室を中心とした学生、教員、地域住民有志、取手アートプロジェクトがヤギの飼育をプラットフォームとしてつながり、壁も屋根もないアーツセンターとして活動。多様なメンバーがヤギと共に行う日々の営みを通じて、現代社会における持続可能な表現、次世代のコミュニティのあり方も模索している。

主な展覧会に第一回および第二回「ヤギの目ビエンナーレ」（共に、たいけん美じゅつ場VIVA、茨城、2021および2023）がある。また、これまでの活動記録をまとめた書籍『ヤギの目記録採取帳2020ー2023』（2023）と『ヤギの目記録採取帳 2023ー2025』（2026）を発行している。

助成：JST共創の場形成支援プログラム「共生社会をつくるアートコミュニケーション共創拠点」（JPMJPF2105）
協賛：株式会社モノクローム



《ヤギの目》



《ヤギの目》概念図

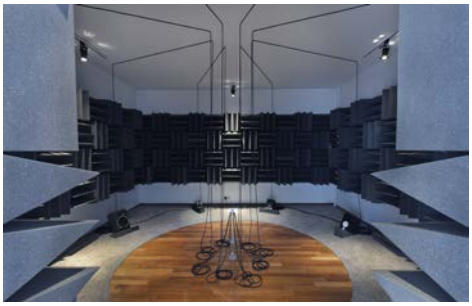
青海エリア ｜ 青海南ふ頭公園

参加アーティスト

ハルーン・ミルザ | Haroon Mirza

1977年ロンドン生まれ、同地在住。音や光、電気のあいだに生じる現象や干渉を積極的に取り入れ、その仕組みやプロセスをあえて見せることで規定のルールを問いなおす彫刻、インスタレーション、パフォーマンスなどを発表している。その関心は、社会政治的なトピックにも言及するアシッド・ハウスからサイマティクスやシャーマニズムまで他領域を横断している。
主な展示に「Everything Was, Is and Always Will Be」（Fire Station、ドーハ、カタール、2026）、「Waves and Forms」（アバディーン美術館、アバディーン、スコットランド、2020）、「The Construction of an Act」（オーストラリア現代美術センター（ACCA）、メルボルン、オーストラリア、2019）などがある。「第54回ヴェネチア・ビエンナーレ」（ヴェニス、イタリア、2011）では銀獅子賞を受賞した。

助成：ブリティッシュ・カウンシル
協賛：株式会社モノクローム



《Adam, Eve, Others and a UFO》2013
Installation view at Marres House for Contemporary Culture, 2014
Photo by Gert Jan van Rooij

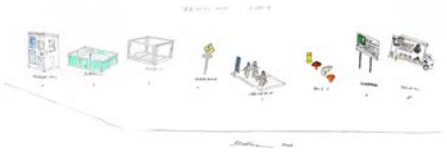


Courtesy the artist

竹岡雄二 | Takeoka Yuji

1946年京都府生まれ、デュッセルドルフ拠点。現代美術の展示方法に関する形式に強い関心を持ち続け、「ものを作る」ことから「ものを見せる」ことを作品のテーマに制作を行っている。台座そのものを彫刻とし、余分な要素を削ぎ落として作品を見せる「空間呈示」をすることで新たな知覚や意味を生みだす作品を手がけている。
　主な展覧会に「台座から空間へ」（国立国際美術館、大阪、2016／埼玉県立近代美術館、遠山記念館、共に埼玉、2016）、「Zum Nullpunkt der Bildhauerei, Sculptur at Square Zero」（ゲルハルト・マルクスハウス、ブレーメン、ドイツ、2012）、「Yuji Takeoka: Museo」（ヨゼフ・アルバース美術館、ボトロップ、ドイツ、2011）、「Documenta 9」（カッセル、ドイツ、1992）などがある。

協賛：東急株式会社



「TOKYO ATLAS 2026 公共彫刻のためのプラン」2026



Photo by Tamon Takeoka

青海エリア ｜ 地下駐車場（青海南ふ頭公園内）

会場

青海南ふ頭公園には、全長197.5mの地下空間が広がっています。今回の企画に際し、現在は利用を休止しているこの場所が特別に展示会場の一つとして開放されます。地上の展示と対をなすような、また、通常は足を踏み入れることの出来ないこの地下空間の特性を活かした展示を予定しています。

※本会場は時間指定予約制となります。
https://artsticker.app/events/157445



地下駐車場（青海南ふ頭公園内）
1997年4月利用開始、面積7,603.75㎡。216台収容可能な駐車施設。

参加アーティスト

ムン・キョンウォン&チョン・ジュン ｜ Moon Kyungwon & Jeon Joon

ムン・キョンウォン：1969年ソウル（韓国）生まれ。チョン・ジュン：1969年釜山（韓国）生まれ。共にソウル在住。ムンは主に絵画と実験映画、チョンは彫刻とインスタレーションで、それぞれソロ・アーティストとして活動も行ない、2009年よりデュオとしての活動を開始。様々な領域の専門家との対話や協働により「現代世界における芸術の社会的機能と役割は何か」を問い直すプロジェクト「News from Nowhere」を主軸に活動を展開している。
近年の主な展覧会に「Every Island is a Mountain」（Palazzo Malta、ヴェネチア、イタリア、2025）、「Weather Station」（アートソンジェセンター、ソウル、韓国、2022）、「どこにもない場所のこと」（金沢21世紀美術館、金沢、2022）、「Minds Rising Spirits Tuning」（光州ビエンナーレ、光州、韓国、2021）などがある。





《News from Nowhere: Eclipse》
Installation view at Basel Unlimited, Basel, 2022
Courtesy of the artists

カウィター・ワッタナチャヤンクーン ｜ Kawita Vatanajyankur

1987年バンコク生まれ、同地拠点。女性の家事労働や工業用機械の動きを自身の身体を用いて表現した映像や写真のインスタレーション作品で知られる。大量消費社会における人間の疎外感を中心テーマに、近年はAIを用いて記憶と身体に関する探究も行っている。

2026年、上海の余徳耀美術館（Yuz Museum）で個展「Memory Machine」（上海、中国、2026)を開催。

主なグループ展に、シンガポール美術館での「Everyday Practices」（シンガポール、2024）、ヴェネツィア・ビエンナーレでの「The Spirits of Maritime Crossing」（ヴェネツィア、イタリア、2024）、バンコク・アート・ビエンナーレ（バンコク、タイ、2022）などがある。TOKYO ATLASでは、青海の地下駐車場で制作した新作映像作品を発表する。





Photo by Anantaporn Intravisit

《The Machine Ghost in the Human Shell》2024
In Collaboration with Pat Pataranutaporn

イペェ・ヌル ｜ Ipeh Nur

1993年ジョグジャカルタ生まれ、同地拠点。ヌルの作品は、個人的な経験、日常生活における問題、記憶、レジリエンス、そして背景となる歴史的出来事を基盤としている。演劇的なヴィジュアルから着想を得て、主にドローイングを中心に制作しているが、バティック（ろうけつ染め）、陶芸、版画、彫刻、インスタレーション、映像、壁画など、多様なメディウムや技法も用いている。近年は海にまつわる文化、知識の継承、古代神話に言及する作品を発表している。

近年の主な展覧会に「Setelah Padam」（Kedai Kebun Forum、ジョグジャカルタ、インドネシア、2025）、「Sharjah Biennial 16」（シャルジャ首長国、アラブ首長国連邦、2025）、「Constellations」（47 Canal、ニューヨーク、アメリカ、2025）、「Small World Cinema」（SculptureCenter、ニューヨーク、アメリカ、2024）、個展「Menghanyut: Tubuh dan Perjalanan」（Soboman 219 Art Space、ジョグジャカルタ、インドネシア、2022）などがある。





Photo by the artist and ara contemporary

《Ombak Belun Tidur》2024
Photo by Ela Bialkowska, OKNO Studio for PinchukArtCentre/Future Generation Art Prize 2024

青海エリア ｜ 地下駐車場（青海南ふ頭公園内）

参加アーティスト

潘逸舟 ｜ Han Ishu

1987年上海生まれ、東京拠点。幼い頃に上海から青森に移住した自身の経験や視点をもとに、社会と個人の関係のなかで生じる疑問や戸惑いを省察し、自らの身体に反照することで、見るものにそこに内在するイデオロギーや様々な規範のあり方を問いかけている。映像、パフォーマンス、インスタレーション、写真、絵画など多様なメディアにより、真摯ななかにもユーモアあふれる作品を展開している。

近年の主な展覧会に、個展「アートは美しくなければならない」（青森県立美術館、青森、2025）、「MOTアニュアル2021 ー海、リビングルーム、頭蓋骨」（東京都現代美術館、東京、2021）、「ホーム・スイート・ホーム」（国立国際美術館、大阪、2023／丸亀市猪熊弦一郎現代美術館、香川、2024）、「The 11th Asia Pacific Triennial of Contemporary Art」（Queensland Art Gallery ｜ Gallery of Modern Art、ブリスベン、オーストラリア、2024）などがある。

協力：一般社団法人江戸消防記念会





Photo by Sakiko Nomura

《波になる》2026
Courtesy of the artist and ANOMALY

ムハンナド・ショノ ｜ Muhannad SHONO

1977年リヤド生まれ、同地拠点。自身のルーツやアイデンティティへの問いを出発点に、歴史やイデオロギー、物語の単一的な構造を批評的に考察したインスタレーションやドローイング、彫刻など、多岐にわたる作品を発表している。自然と人間の両義的な関係に目を向け、砂漠の砂や風を用いたインスタレーション、ビルのドレン水で生き延びる植物など、自然と人間の複雑な関係を冷静に見つめた詩的で物語性を感じさせる作品が多い。2022年「第59回ヴェネツィア・ビエンナーレ」にてサウジアラビア代表を務めた。

近年の主な展覧会に、「What Remains, Desert X」（コーチェラ・ヴァレー、カリフォルニア、アメリカ、2025）、「海の芸術祭」（釜山、韓国、2023）、「イスラム・アーツ・ビエンナーレ」（ジェッダ、サウジアラビア、2023）などがある。





Photo by Artur Weber

《The Teaching Tree》2022
59th Venice Biennale, the National Pavilion of Saudi Arabia, 2022

ケイティ・パターソン ｜ Katie Paterson

1981年グラスゴー生まれ、スコットランド拠点。地球の歴史、地質学的な時間、自然とのつながり、月や星、宇宙との距離など、存在の起源と人類の関係性に端を発した壮大で抽象的な概念に詩的にアプローチし、フィジカルな体験へと変える作品を発表している。世界各地で発表される作品には、研究機関や研究者、小説家など、さまざまな分野の専門家との協働プロジェクトも多数ある。

近年の主な展覧会やプロジェクトに、「FROM AMBER TO THE STARS」（Mikalojus Konstantinas Čiurlionis National Art Museum、カウナス、リトアニア、2025）、個展「there lay the Days between」（MIT List Visual Arts Center、マサチューセッツ、アメリカ、2024）、ソロプロジェクト「Future Library」（100 Year Commission、オスロ、ノルウェー、2014ー2114）などがある。

助成：大和日英基金
協賛：ヤマハ株式会社





Photo by © James Bennet

《Earth–Moon–Earth (Moonlight Sonata Reflected from the Surface of the Moon)》2007
Photo © Ben Blackall, 2016. Courtesy of the Lowry

篠田太郎 | Shinoda Taro

1964年東京生まれ。2022年没。造園を学んだ後に作家活動を開始する。一貫して人間と自然の関わりを深く問う作品は、ドローイング、彫刻、ビデオ、インスタレーションと多岐にわたり、国際的に高い評価を得ている。パブリックコレクションとして、森美術館、ルイヴィトン財団、日産自動車株式会社などに収蔵。さいたま国際芸術祭（2020年）Martin-Gropius-Bau（ベルリン、2019年）、シャルジャビエンナーレ（2017年）、シドニービエンナーレ（2016年）森美術館（東京、2010年）、広島市現代美術館（広島、2002年）など国内外の展覧会にも多数参加。



《Space Camp Site》2005



Courtesy of
MISA SHIN GALLERY

青海エリア ｜ 地下駐車場（青海南ふ頭公園内）

参加アーティスト

ジュリアン・シャリエール | Julian Charrière

1987年モルジュ生まれ。ベルリン拠点。シャリエールは、パフォーマンス、彫刻、映像、写真などを横断しながら、資源採掘の現場から火山のカルデラ、遠隔地の氷原、核実験場に至るまで、境界的な場所でのフィールドワークを起点に作品を制作。地質学的・文化的なアイデンティティが強く刻まれた場所に身を置くことで、彼はそこに別の歴史の可能性を想像し、「自然」に対する私たちの認識がいかに変化してきたのかを考察する。

主な展覧会に「バンコクアートビエンナーレ2026」（バンコク、タイ、2026）、「Midnight Zone」（ヴォルフスブルク美術館、ヴォルフスブルク、ドイツ、2026）、「Kairos Resounding」（ローレン・グラッソとの2人展）（798CUBE、北京、中国、2026）などがある。



《Midnight Zone》2024
Installation view: Museum Tinguely, Basel, 2025. Photo by Jens Ziehe



© The Artist
Photo by Art/beats, 2026

青海エリア ｜ 東京国際クルーズターミナル

会場

東京の海の玄関口である東京国際クルーズターミナルは、世界最大級の客船に対応可能な施設として、大型船をはじめ多様な客船の受け入れを行っています。CIQをはじめとする受け入れ機能を備える一方、客船の入港がない日はイベント会場としても活用されています。ここでは、アブラハム・ポワンシュヴァルの映像作品を上映。さまざまな国から人が立ち寄り、またどこかへ旅立つターミナルという、どこか浮遊感のある場所との対話をもたらします。

※客船入港時は、原則として作品はご覧いただけません。
東京都港湾局ウェブサイトの入港予定をご確認ください。



東京国際クルーズターミナル
2020年にオープン。4階建、延床19,000㎡。世界最大級のクルーズ客船にも対応可能なクルーズターミナル。

青海エリア ｜ 東京臨海部広報展示室TOKYOミナトリエ

会場

ATLAS リサーチ&ドキュメンツ

江戸時代から現在、そして未来までの東京港と臨海副都心のあゆみを紹介する東京臨海部広報展示室TOKYOミナトリエ。大きな窓からは地上100mの位置から東京臨海部が見渡せ、TOKYO ATLASの会場の一つでもある青海南ふ頭公園も一望できます。ここでは、「ATLASリサーチ&ドキュメンツ」として、土地のリサーチに基づき本展のヴィジュアル・アイデンティティを構築した田中義久＋centre Inc.の制作プロセスや、アーティストたちのリサーチ過程を一部ご紹介します。



東京臨海部広報展示室
TOKYOミナトリエ
「港」「ヒストリエ（歴史）」「アトリエ」を合わせた名称で、江戸時代から現在、そして未来までの東京港と臨海副都心のあゆみを紹介する。

4 ヴィジュアル・アイデンティティ









1｜出典：国土地理院所蔵の空中写真　2｜空中写真（国土地理院ウェブサイトより2001年 国土地理院撮影、港区、品川区）を加工しcentre Inc. が作成　3｜「品川御台場模型（第2工程）」品川区立品川歴史館常設展示

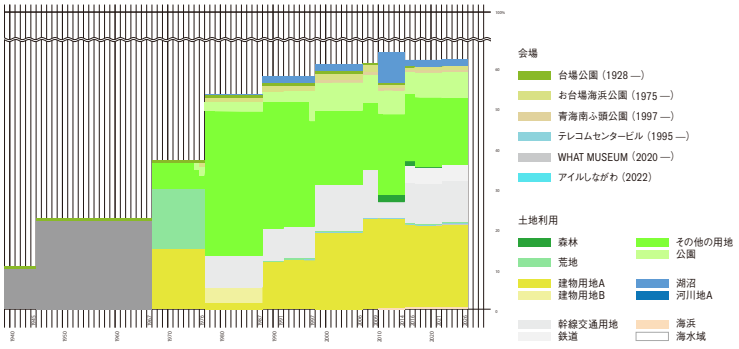
タイトルに含まれる「ATLAS」は地図帳の意味を含み、場所ごとの特性や成り立ちを読み解いていく視点を示しています。初回の開催地である臨海エリアは、江戸時代に防衛施設として築かれた台場をはじめ、時代ごとに異なる役割や機能のもとで段階的に形成されてきた埋め立て地であり、港湾・物流機能を担ってきた青海、倉庫群を基盤に文化活動が集積してきた天王洲と、各エリアがそれぞれ異なる性格を有しています。

こうした背景を踏まえ、ヴィジュアル・アイデンティティ（VI）は、東京で始まる国際美術展としての認知を担うと同時に、開催エリアを読み解くための視点として機能することが重要だと考えました。土地に刻まれてきた変化や人の営みをリサーチし、VIとしての視認性を担保しながら、場所性を象徴的に可視化しています。「TOKYO ATLAS」のVIは、単一のロゴや固定的なグラフィックによって示されるものではなく、場所性や文脈に応じて立ち上がる視覚的な装置です。都市の成り立ちや現在を感じ取るための手がかりとなり、展示体験を支える基盤となることを目指しています。

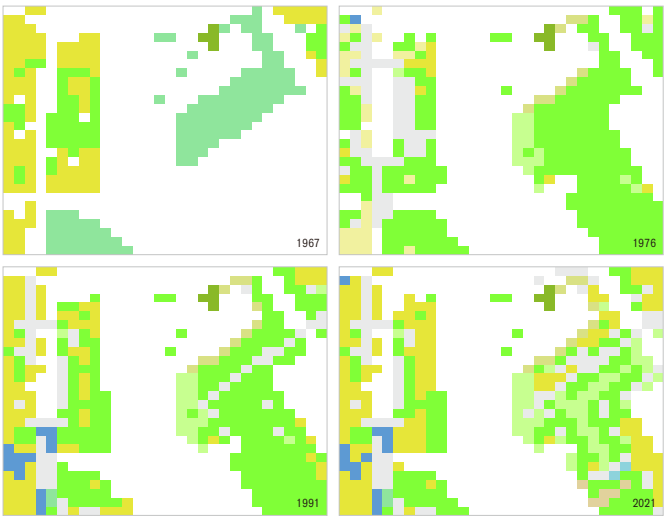
土地の変遷をグラフとしてヴィジュアル化

臨海エリアの年代別土地利用データをもとに、用途別面積の変化を算出し、グラフとしてヴィジュアル化しました。埋め立てによる土地の拡張と、そこに生まれてきた人の営みの変遷を、この土地固有の視覚的アイデンティティとして捉えています。

さらに、台場・青海・天王洲の各開催エリアごとに面積を再集計し、それぞれに対応するグラフを作成しています。各エリアの性質を反映したヴィジュアルとして、開催場所ごとに展開していく予定です。



右図の各土地利用面積を集計しグラフ化



台場・青海・天王洲エリアの周辺の埋め立てと土地利用の変遷（抜粋）

田中義久+centre Inc.

1980年生まれ。武蔵野美術大学空間演出デザイン学科卒業、慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科修士課程修了。主宰するcentre Inc.では、行政・教育・企業機関などと協働し、紙媒体における視覚言語の拡張を起点に、今日のデザイン領域をリサーチし、その成果を社会実装している。主な仕事に、東京都写真美術館、第58回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展 日本館、国際芸術祭あいち2022、TOKYO ART BOOK FAIRのVI計画、Takeo Paper Show 2018、ISSEY MIYAKEのアートディレクションなど。また、アーティストデュオ「Nerhol」としても活動している。令和6年度（第75回）芸術選奨文部科学大臣新人賞受賞。

上図｜国土数値情報（土地利用細分メッシュデータ）（国土交通省）および、国土調査（土地分類調査・水調査）（国土交通省）を加工してcentre Inc.が作成　出典：https://nlftp.mlit.go.jp/ksj/gml/datalist/KsjTmplt-L03-b.html
https://nlftp.mlit.go.jp /kokjo/inspect/landclassification/land/land_history_2011/index_tile.html

5 関連企画

新進気鋭のアーティストやキュレーターを国内外に広く紹介する企画展「座標」のほか、子供向けのワークショップや、〈アート×ビジネス〉をテーマとした企業情報展等のプログラムも実施予定です。各種プログラムについては、随時公表いたします。

座標 | Coordinates　東京都による支援作家たちの現在地

企画展「座標」は、東京都がこれまで支援してきたアーティストやキュレーターを紹介し、その活躍を後押しすることを目的に開催します。TOKYO ATLASという国際的な舞台において、それぞれの活動の軌跡や現在地、多様な視点や実践が集積し、交差することで、新たな座標を描き出すことを目指します。



展示期間：10月10日（土）～ 12月20日（日）
展示場所：WHAT MUSEUM

Tokyo Arts and Space　ARTS COUNCIL TOKYO

「電気羊の夢のあとで」ー 未完の展示記録

本美術展の初期計画を共に構想してきた、故 山峰潤也氏の未完の企画をテレコムセンターにてドキュメント展示。国内外で独自に築いてきた実践のアーカイブと共に彼の軌跡をたどります。



展示期間：10月10日（土）ー12月20日（日）
展示場所：テレコムセンタービル5階

協賛：株式会社NYAW

Art & Business gallery

アーティストへの支援やコラボなど企業によるアート関連の取り組みをパネル展示にて紹介します。企業とアートの多様な関わり方を発信することで、芸術文化を支える多様な担い手への理解を深めるとともに、アートとビジネスの持続的な好循環を生み出す契機となることを目指します。



展示期間：11月10日（火）～ 12月20日（日）
展示場所：テレコムセンタービル5階

品川区立品川歴史館特別展
「品川湾から東京港へ―未完の港湾都市―」

東京港が位置する海域は、かつて品川湾と呼ばれていました。縄文時代から人々が暮らし、やがて交通の要衝として発展していった品川。御台場の築造で変わる臨海部、明治時代以降の海の変化について、品川湾から東京港への変遷、発展の歴史を紹介します。



展示期間：10月10日（土）ー12月20日（日）
展示場所：品川区立品川歴史館

6 連携企画

TOKYO ATLAS会期中は、周辺地域や連携先との様々な試みを実施いたします。どうぞご注目ください。

ヤギの目 With 都立臨海青海特別支援学校

青海南ふ頭公園で作品を展開する「ヤギの目」は、隣接する東京都立臨海青海特別支援学校の子どもたちとの交流プログラムを実施します。会期前にはヤギの学校訪問やワークショップを行い、会期中には、子どもたちが制作した作品を会場内に展示予定。本プログラムは、アートを介した交流を通じて、子どもたちの創造性を育むとともに、来場者と地域をつなぐ機会を創出するものです。会期中にも複数回ワークショップを実施予定です。



次世代イベント警備の実証

セコム、NTTドコモビジネス、アジラが次世代イベント警備の実証を実施。セキュアなモバイル通信を活用した安全な映像伝送とAI画像解析により、人流分析や行動検知の有効性を検証。さらに、セキュリティロボット「cocobo」と人による警備を組み合わせ、広域屋外会場における警備品質向上と業務効率化の可能性を探ります。

実施会場：台場公園・お台場海浜公園、青海南ふ頭公園、テレコムセンタービル



自律走行型セキュリティロボット「cocobo」

TOKYO ATLAS VIRTUAL EXHIBITION

台場公園での展示をオンライン上で体験できる「TOKYO ATLAS VIRTUAL EXHIBITION」を公開予定です。会場を3Dデータとして記録し、来場者はパソコンやスマートフォンなどの端末から、実際に会場を巡るような感覚で展示を体験することができます。会場をバーチャル空間上に再現することで、時間や場所を問わず、より多くの方に展覧会を体験いただける環境を創出します。



お台場エリアと天王洲エリアを結ぶ特別クルーズ船「ARTE TOKYO CRUISE」を運航

期間：10月10日～12月20日
運航日：上記期間中、土日祝を中心に運航
航路：お台場海浜公園～天王洲ピア
水辺から東京の魅力を楽しめる多彩なコースを展開
時間：10時～16時台を中心に運航
便数：1日4便程度
運賃：1乗船区間（例：お台場海浜公園→天王洲ピア）大人 1,500円
（高校生以下半額・未就学児は大人1人につき1人まで無料）
定員：40人程度
共催：品川区
チケット販売：https://mizubetokyo.com/artetokyocruise/



7 イベントリスト（2026年10月8日時点）

イベント一覧

※イベント内容は一部変更となる可能性がございます

10月10日（土） 11:00 ～ 12:30
オープニング・シンポジウム

概要：建畠晢AD、三木あき子AD、青柳正規実行委員長、帆足亜紀氏が東京で国際美術展を開催する意義とその効果などについて語る
会場：MONOフューチャーセンター（テレコムセンタービル14階）
登壇予定者：建畠 晢、三木あき子、青柳正規、帆足亜紀（モデレーター）
対象・参加：定員150名／要予約
備考：英語字幕あり

10月10日（土） 14:30 ～ 16:00
青海エリア参加アーティストによるトーク

概要：三木あき子ADが担当した青海エリアの参加アーティストが、作品と制作背景を紹介する開幕初日のトークプログラム
会場：TOKYO ミナトリエ
登壇予定者：三木あき子、カウィター・ワッタナチャヤンクーン、イペェ・ヌル、ハルーン・ミルザ
対象・参加：定員50名／予約不要
備考：日本語・英語字幕を予定

10月12日（月・祝） 15:00 ～ 17:00
台場・天王洲エリア参加アーティストによるトーク

概要：建畠晢ADが担当した台場エリア・天王洲エリアの参加アーティストが、作品と制作背景を紹介するトークプログラム
会場：お台場海浜公園　※雨天会場：テレコムセンター 5階
登壇予定者：建畠 晢、イケムラレイコ、石毛健太、水木塁、盛圭太
対象・参加：定員50名／予約不要

10月12日（月・祝） 17:00 ～ 18:15（トーク）／ 18:30 ～ 21:00（交流会）
トークイベント&交流会

概要：渋谷のMuseum of Imaginary Narrative Artsにて開催される、アーティストの竹岡雄二、建築家・藤原徹平、本展ADの三木あき子によるトーク。トーク後には、交流会も実施
会場：Museum of Imaginary Narrative Arts（MINA）
登壇予定者：竹岡雄二、藤原徹平、三木あき子
対象・参加：予約優先
料金：
トークイベント｜17:00-18:15　予約優先、無料（1ドリンク制）
交流会｜18:30～21:00　予約不要・参加費1100円（税込）
協賛：東急株式会社

公式サイトイベントページ
https://tokyoatlas.jp/events

ArtSticker予約ページ
https://artsticker.app/events/157214

7 イベントリスト（2026年10月8日時点）

イベント一覧

※イベント内容は一部変更となる可能性がございます

10月17日（土） 11:00 ～ 12:00 ／ 14:00 ～ 15:00
「プチバトーのはぎれとロスフラワー ®でつくるリメイク・モビール」

概要：プチバトーのサンプル品や規格外品の端切れと、まだ美しいのに捨てられてしまうお花「ロスフラワー®」を使って、オリジナルのモビールをつくる（TOKYO カルチャーデビュー・ワークショップ）
会場：テレコムセンター 5階
対象・参加：5歳～小学6年生、各回20名／要予約（申込期限10月16日）
主催：東京都、アーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団）
ワークショップ講師：株式会社プチバトージャパン

10月25日（日） 11:00 ～ 12:15 ／ 13:00 ～ 14:15 ／ 14:45 ～ 16:00
牛乳パックのアップサイクル版画体験（キッチンリトグラフ アート x 環境教育）

概要：一度使ったものを別の用途で生まれ変わらせる「アップサイクル」身近な牛乳パックを版材にして、版画制作を体験する多摩美術大学連携プログラム
（TOKYO カルチャーデビュー・ワークショップ ネクスト・クリエイション・プログラム）
会場：テレコムセンター 5階
対象・参加：小学3 ～ 6年生と保護者、各回10組／要予約（申込期限10月21日）
主催：東京都、アーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団）、多摩美術大学

11月8日（日）、11月23日（月・祝）、12月5日（土）、12月12日（土）
国際美術展TOKYO ATLAS 鑑賞プログラムツアー

概要：展示エリアを巡る一般向け鑑賞ツアー
会場：対象展示エリア
対象・参加：各回定員30名／要予約※10月より順次予約開始
料金：無料／一部有料のプログラムがあります
共催：一般財団法人カルチャー・ヴィジョン・ジャパン、カルチュア・コンビニエンス・クラブ株式会社
企画：カルチュア・コンビニエンス・クラブ株式会社

11月23日（月・祝） 13:00 ～ 16:00
TOKYO ATLAS おしごとマップ ワークショップ

概要：仕事や役割を見える形に置き換え、社会やまちとのつながりを考える体験プログラム。ATLASに関わる職業を可視化したマップ展示と、こども記者による取材体験
会場：テレコムセンター、青海南ふ頭公園
対象・参加：中高生、定員40名／要予約※10月中旬より予約開始
共催：一般財団法人カルチャー・ヴィジョン・ジャパン、カルチュア・コンビニエンス・クラブ株式会社
企画：株式会社TAM

公式サイトイベントページ
https://tokyoatlas.jp/events

ArtSticker予約ページ
https://artsticker.app/events/157214

7 イベントリスト（2026年10月8日時点）

イベント一覧

※イベント内容は一部変更となる可能性がございます

12月5日（土） 14:00 ～ 16:00
品川区立品川歴史館 トーク

概要：地域の歴史・文化とTOKYO ATLASの展示をつなぎ、地域から企画を読み解くトーク
会場：品川区立品川歴史館
登壇予定者：冨川武史（品川区立品川歴史館学芸員）、木村こころ・中川千恵子（座標キュレーター）
対象・参加：定員100名／要予約
連携：品川区立品川歴史館

12月6日（日） 10:00 ～ 12:00
盛圭太ワークショップ

概要（予定）：『天王洲をつなぐ100本の糸（仮）』をテーマに、参加者が地域と人のつながりを体験する。
街歩きと創作WSを組み合わせた内容
会場：天王洲エリア
対象・参加：定員30名／要予約※11月2日より受付開始
共催：一般財団法人カルチャー・ヴィジョン・ジャパン、カルチュア・コンビニエンス・クラブ株式会社
企画：藤原羽田合同会社

公式サイトイベントページ
https://tokyoatlas.jp/events

ArtSticker予約ページ
https://artsticker.app/events/157214

8 開催概要

名称
日本語：国際美術展 TOKYO ATLAS（読み方：コクサイビジュツテントウキョウ アトラス）
英語：TOKYO ATLAS International Art Exhibition

会期
2026年10月10日（土）ー12月20日（日）［72日間］※月曜休（但し、10月12日（月祝）、11月23日（月祝）は開場、翌火曜休）
※16時30分最終入場　※地下駐車場は時間予約制

会場 ※一部を除き入場無料（予定）
［台場エリア］ 台場公園・お台場海浜公園
［青海エリア］ テレコムセンタービル、青海南ふ頭公園、地下駐車場（青海南ふ頭公園内）、東京国際クルーズターミナル、
東京臨海部広報展示室TOKYOミナトリエ
［天王洲エリア］ アイルしながわ、WHAT MUSEUM

主催
東京都、東京国際文化芸術祭実行委員会、公益財団法人東京都歴史文化財団

公式ホームページ
tokyoatlas.jp　Instagram：@tokyoatlas_official

報道関係のお問合せ先
国際美術展「TOKYO ATLAS」広報事務局（株式会社サニーサイドアップ内）
TEL：03-6894-3200　Email：tokyo_atlas_pr@ssu.co.jp
担当：田中（080-4191-6365）、蓮見（080-4652-1423）、堀江、俊成

オフィシャル素材ダウンロード先
https://x.gd/9UQPH

これまでのプレスリリース
これまでに発表したプレスリリースについてはQRコードからご確認ください。
https://tokyoatlas.jp/pressrelease

9 パートナー（2026年10月8日時点）

助成

文化部 MINISTRY OF CULTURE REPUBLIC OF CHINA (TAIWAN)
BRITISH COUNCIL
大和日英基金 DAIWA ANGLO-JAPANESE FOUNDATION
AMBASSADE DE FRANCE AU JAPON
INSTITUT FRANÇAIS アンスティチュ・フランセ
mecenat ArtsFund 社会創造アーツファンド ［公社］企業メセナ協議会

補助

日本博 JAPAN CULTURAL EXPO

協賛

TOKYO TELEPORT CENTER, INC.
TERRADA
DNP 大日本印刷
信頼される安心を、社会へ。 SECOM
NSSI NAKAGAWA SPECIAL STEEL INC. 中川特殊鋼株式会社
ミサワホーム
TWR りんかい線
品川区
たてものを、いきものに LIVZON 大成温調株式会社
ゆりかもめ YURIKAMOME
TOKYO MONORAIL
銀座シルク洋装店
asics sound mind, sound body
Art Sticker
東急
桑原商店
セブン-イレブン
NYAW
湖山医療福祉グループ
アクアウェッジ株式会社
mono
JTB 感動のそばに、いつも。
株式会社 東京臨海ホールディングス
ANA
docomo Business
route
HIGHTIDE
SGC
Monochrome
TAKENAKA
ぴあ
野村不動産
MIZUHO みずほ銀行
agnès b.
YAMAHA
DARUMA
横浜化成株式会社
中部カラー工業株式会社
Shachihata

後援

港区、江東区